

# 大学生の居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」の イメージと居場所感の関連<sup>1</sup> — キャラの受けとめの観点から —

## The Relation between Sense of Ibashos and the Images of College Students' "True self" and "Mask self" at the Ibashos — from viewpoints of acceptance of KYARA (my character) —

重橋のぞみ・伊藤美希\*

Nozomi Jubashi・Miki Itou

### 【問題と目的】

近年、友人関係においてグループ志向が強いことや、その中でも内面的な関わりを避けて表面的な楽しさや繋がりを重視する傾向が強いことが指摘されている(土井、2009)。そのような関わりの中で、「キャラ」という用語を用いたコミュニケーション様式が多用されている。キャラとは、「キャラクター (character)」の略語であり、学校をはじめとするコミュニティ内において用いられる若者言葉である(小川・佐々木 2018)。「いじられキャラ」や「天然キャラ」といったように、何らかの特徴を表す言葉を前に伴って使用されることが多い。千島・村上(2016)は、キャラを「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ」と定義した。キャラを介したコミュニケーションは、「コミュニケーションの取りやすさ」、「存在感の獲得」、「理解のしやすさ」というメリットがある。一方で、小川・佐々木(2018)は、集団のなかで生きる自分自身と、個として生きる自分自身との狭間で生じる葛藤のプロセスをキャラという仕組みが複雑化させていると指摘している。

大学生と中学生を対象にキャラの受け止めと心理的適応および居場所感との関係を検討した千島・村上(2016)は、大学生のキャラの積極的受容は心理的適

応と正の相関があることを示した。また、キャラの消極的受容と居場所感に正の相関を示した。一方、中学生では「友人から付与されたキャラを受容しにくく、キャラに合わせて振る舞うことが、心理的不適応と関連すること」を示した。これより、大学生は付与されたキャラに不満がある場合でもそれを引き受けることで居場所感を得ていると考えられる。このキャラという対人関係における自己の規定のされ方は、「居場所」の問題と関連していることが考えられる。

居場所に関する研究は1990年代から盛んに行われている。1980年代に不登校児童生徒が増加し、フリースクールが誕生すると、「居場所」の重要性が注目されるようになった(住田,2003)。実践報告から臨床理論的研究が行われるようになり、北山(2003)は居場所論を展開している。現在まで数多くの研究があり、関心の高さがうかがえる(石本:2008、中藤:2012)。「居場所」とは元来、人の所在や住居地を表す物理的次元の言葉である。しかし、現代では「安心でき、自分らしくいられる場所」といった心理的次元の意味で用いられることが増えている(中藤 2017)。

キャラという対人関係における自己の規定のされ方は、「居場所」の問題と関連することを上述したが、自己の在り方と「居場所」の関連を検討した研究は少ない(高木、2002;富永・山田、2016)。富永・山田(2016)

\*福岡女学院大学人間関係学部心理学科卒業生

は、「本当の自分」と「仮面の自分」という二つの自己像を取り上げ、これらの自己像の関係性イメージの違いによって居場所感に差異が見られるかを検討している。その際、「本当の自分」と「仮面の自分」の自己像を投影的手法を用いて6つのカテゴリーに分類し検討している。その結果、「関係性イメージの違いによって学校場面での居場所感に差異が見られ」、「自己のあり方によってその場を「居場所」と感じられやすいかどうかの違いが生じることを示している。

他者から割り当てられた「キャラ」も「仮面の自分」も「本当の自分」に関連し、「本当の自分」との狭間で葛藤し、ともに自己を規定するものとして「居場所」の問題に関連すると考えられる。しかし、これまで「キャラ」「自己」「居場所」の関連を検討した研究はみられない。そこで、本研究では富永・山田（2016）の「本当の自分」と「仮面の自分」という二つの自己像の関係性のあり方を用いて、居場所におけるこれら自己像とキャラの受け止めの関係を検討する。居場所感の定義は、則定（2008）の「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場所があるという感情」とする。

ところで、岩井（2014）は1つの居場所だけでは自我同一性の発達課題は達成されないことを指摘しており、現在では複数の居場所の重要性が示唆される。西本・石本（2017）は、先行研究を用いて居場所の分類を紹介している。例えば、安斎（2003）は居場所を「後ろ向きな居場所」と「前向きな居場所」に分類している。藤竹（2000）は「自分が他人によって必要とされ」集団における「自分のポジションを明確」にできる「社会的居場所」と、「人間が自分自身であることを実感することができる」「人間的居場所」に大別している。複数の居場所を持つ者は各々のコミュニティでのキャラは同じであろうか。キャラは付与されることもあるため、居場所によって使い分けている可能性が考えられる。そこで、本研究では2種類の居場所を設定し、各居場所における特徴も合わせて捉えることとする。2種類の居場所とは、「最も快適で居心地の良い居場所」と「居心地は悪いけれど大切な居場所」である。

## 【方法】

**調査対象者** F市内のA大学の女子大学生に質問紙調

査を依頼した。回答の不備や調査への同意を得られなかった者を削除し、分析対象者は女性77名であった。

**調査時期** 2018年10月に実施した。

**調査方法** 大学で行われている講義で質問紙を配布し、回答後、その場で回収した。予め調査目的を説明し、研究への協力を同意をした者を対象とした。なお、調査は無記名回答で任意であること、回答の拒否や中断は可能でそれによる不利益は生じないことを質問紙の表紙に明記し、口頭でも説明した上で調査依頼を行った。なお、上記の説明後、質問紙への回答に同意したものに対して、「仮面の自分」と「本当の自分」の位置関係を示した図の説明を口頭で行ない、理解を得た上で各自のペースで回答を求めた。

**質問紙の構成** 質問紙は、(1)フェイスシート、(2)各自の居場所、(3)居場所感尺度、(4)仮面の自分と本当の自分の位置関係イメージ図、(5)キャラの有無、(6)キャラの受け止め方尺度およびキャラ行動尺度で構成される。

### (1) フェイスシート

年代と研究への同意の有無について記入を求めた。

### (2) 各自の居場所

居場所について、「居場所とは、心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場所」と説明した上で、居場所数と居場所の種類を複数回答で尋ねた。また、複数回答した居場所の中から「最も快適で居心地の良い居場所（以後、居心地よい居場所）」と「居心地は悪いけれど大切な居場所（以後、居心地悪い居場所）」に当てはまる居場所を1つずつ選択するよう求めた。当てはまる居場所がない場合は、「当てはまるものがない」をチェックするよう求めたため、「居心地よい居場所」のみに回答した回答者もいた。

### (3) 仮面の自分と本当の自分の位置関係イメージ図

富永・山田（2016）により作成された「本当の自分」と「仮面の自分」の関係性イメージより、6つのイメージ図を用いた（図1参照）。白が「本当の自分」、黒が「仮面の自分」を示す。A、仮面の自分が本当の自分の内側に位置する（内側）、B 仮面の自分が本当の自分から分離している（外側分離）、C 仮面の自分が外側にあるが本当の自分とつながりをもっている（外側接触）、D 仮面の自分が本当の自分を完全に囲む（完全包

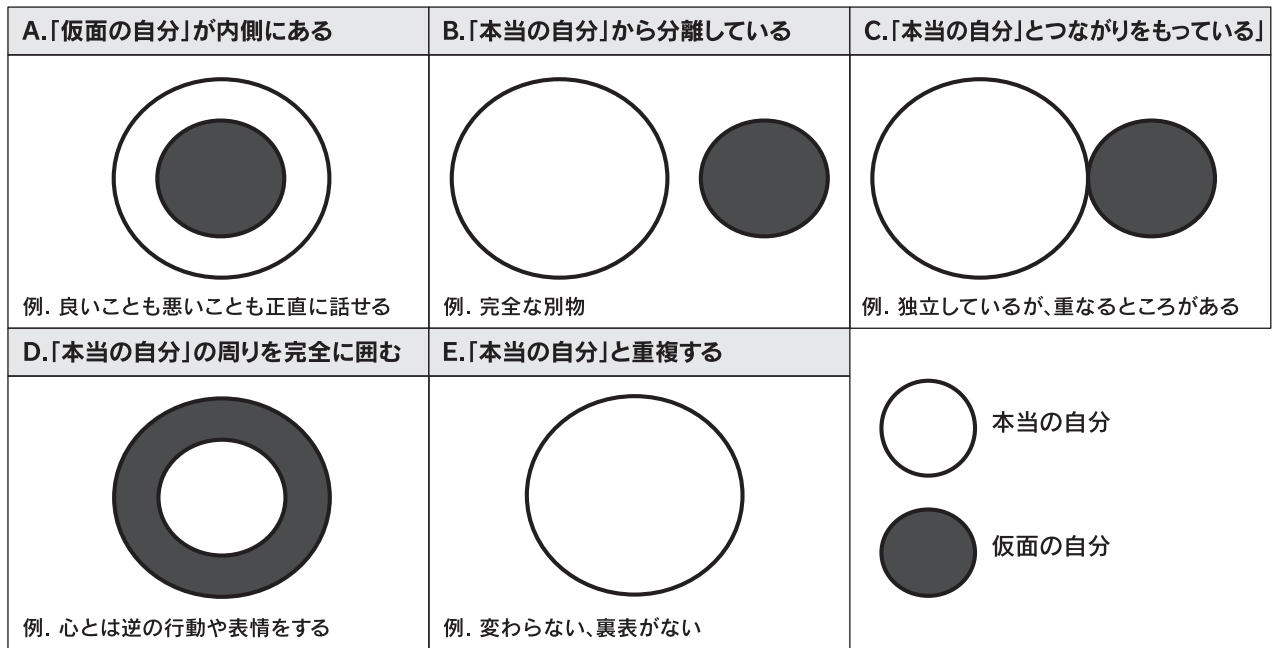


図1 仮面の自分と本当の自分の位置関係イメージ図モデル

囲)、E 仮面の自分と本当の自分が重複する（重複）の6種類である。

質問紙には、「本当の自分とは、様々なことに対する感情を素直に感じ表現できること。仮面の自分とは、自分の思いに反した態度や感情を表に出すこと」として説明した。その上で、「居心地よい居場所」と「居心地悪い居場所」において、自分の状態に最も近いイメージ図をそれぞれ選ぶよう求めた。なお、(2)の問いにて「当てはまるものがない」と回答した場合は回答しなくてよい旨説明した。

(4) 居場所感尺度

富永・山田 (2016) の「居場所感尺度」の4因子(役割感、被受容感、安心感、本来感)を参考に、各因子から1項目を採用して居場所感を尋ねる質問項目を作成した。役割感として「自分は誰かの役にたっている」、被受容感として「いつでも自分を受け入れてくれる」、安心感として「居心地がよい」、本来感として「ありのままの自分でいいのだと感じる」を採用した。なお、「居心地よい居場所」と「居心地悪い居場所」それぞれにおける居場所感について、「とてもあてはまる(5点)」「ややあてはまる(4点)」「どちらでもない(3点)」「あまりあてはまらない(2点)」「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。

(5) キャラの有無.

「居心地よい居場所」と「居心地悪い居場所」にお

いて自分にキャラがあると捉えているかを確認するため、「問2であげた居場所において、あなたは〇〇キャラだねなどと言われることがありますか。なお、キャラとはキャラクターの略で、「天然キャラ」や「愛されキャラ」などがあります。」と説明した。キャラの有無について回答を求めた。

(6) キャラの受け止め方尺度およびキャラ行動尺度  
千鳥・村上 (2016) の「キャラの受け止め方尺度 (13項目)」と「キャラ行動尺度 (3項目)」を使用した。「キャラの受け止め方尺度」は、キャラの積極的受容、キャラの拒否、キャラへの無関心、キャラの消極的受

表1 キャラの受け止め方およびキャラ行動尺度の質問項目

項目
1. _____ キャラであることに満足している。
2.自分は _____ キャラじゃないのと思うことがある。
3.自分が _____ キャラであろうとなかそうと、どちらでも良い。
4.周りから _____ キャラだと言われるのは、しょうがないと思う。
5.自分を _____ キャラだと扱わないでほしい。
6.自分は、周りがつけた _____ キャラを喜んで受け入れている。
7.自分がどんなキャラであろうとどうでもよい。
8.自分は _____ キャラと言われるのが嫌いだ。
9.自分は _____ キャラであることを気に入っている。
10.周りが自分にどんなキャラをつけてもかまわない。
11. _____ キャラとして扱われるのはやむを得ないと思う。
12.自分が _____ キャラだと言われるのは不愉快だ。
13.自分が _____ キャラであることが嬉しい。
14.普段から _____ キャラとしてふるまっている。
15. _____ キャラを演じることがよくある。
16.自分は、 _____ キャラにそった行動をしている。

表2 居場所として回答された頻度および割合

	家族	友人	恋人	アルバイト	サークル・部活動	SNS	一人の時間	ペットとの時間	専門の相談機関	大学	合計
居心地良い居場所	<i>n</i> 28	15	8	2	4	0	17	4	0	2	80
	% 35%	18.75%	10%	2.5%	5%	0%	21.25%	5%	0%	2.5%	100%
居心地悪い大切な居場所	<i>n</i> 7	2	0	3	1	2	3	0	5	2	25
	% 28%	8%	0%	12%	4%	8%	12%	0%	20%	8%	100%

表3 居場所別の「本当の自分」と「仮の自分」位置関係イメージ図の分類結果

	内側	外側分離	外側接触	完全包囲	重複	合計
居心地良い居場所	<i>n</i> 27	2	19	3	21	72
	% 37.5%	2.78%	26.39%	4.17%	29.16%	100%
居心地悪い大切な居場所	<i>n</i> 3	1	15	6	5	30
	% 10%	3.33%	50%	20%	16.67%	100%

容の4因子から構成されている。項目について、表1に示す。

「問5で回答したあなたのキャラに関しておたずねします。以下の各項目は、現在のあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまるもの1つに○をつけてください」という指示に対し、表1の項目に「とてもあてはまる(5点)」「ややあてはまる(4点)」「どちらでもない(3点)」「あまりあてはまらない(2点)」「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。なお、問5でキャラがないと回答したものは本問には回答せずに終了した。

## 【結果】

### 1. 居場所の内容

「居心地良い居場所」と「居心地悪い大切な居場所」として選ばれたものの頻度および割合を表2に示した。

### 2. 居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係

「居心地良い居場所」と「居心地悪い大切な居場所」における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係イメージ図の回答頻度を表3に示す。

各居場所における位置関係イメージ図の回答頻度の差について、 $\chi^2$ 検定を行った。その結果、「居心地良い居場所」における位置関係イメージ図の回答頻度に有意な差がみられた( $\chi^2(4)=35.22, p<.01$ )。残差分析の結果、内側・外側接触・重複は差がなく、これらのイメージ図は外側分離・完全包囲よりも回答頻度が有意に高かった。これより、「居心地良い居場所」における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係は

内側・外側接触側・重複が多く、外側分離・完全包囲が少ないと言える。

「居心地悪い大切な居場所」における位置関係イメージ図の回答頻度に有意な差がみられた( $\chi^2(4)=19.33, p<.01$ )。残差分析の結果、外側分離と外側接触のみイメージ図で有意な差がみられた。これより、「居心地悪い大切な居場所」における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係は、外側接触が外側分離より有意に少ないと言える。

### 3. 居場所における居場所感の比較

「居心地良い居場所」と「居心地悪い大切な居場所」の居場所感得点の差について、*t*検定を行った。その結果は有意であり( $t(29)=4.76, p<.01$ )、「居心地が良い居場所」の居場所感得点が「居心地悪い大切な居場所」の得点より高かった。平均および検定結果を表4に示す。

### 4. 居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係イメージ図別の居場所感の比較

「居心地良い居場所」と「居心地悪い大切な居場所」において、「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係をどのように捉えているによって居場所感に差があるかを検討するために、居場所別に一要因の分散分析を行った。なお、イメージ図の回答頻度に差が

表4 居場所別の居場所感の平均及び*t*検定結果

	居場所感得点(N=30)			<i>df</i>
	M	(SD)	<i>t</i> 値	
居心地良い居場所	4.02	(0.72)	4.762***	29
居心地悪い大切な居場所	3.22	(0.80)		

\*\*\*  $p < .001$

表5 各居場所におけるイメージ図選択群と居場所感の平均及び分散分析結果

		内側	外側分離	外側接触	完全包囲	重複	F値	多重比較
居心地良い居場所	<i>n</i>	26	—	18	—	19	3.554*	内側>外側接触 重複>外側接触
	M (SD)	4.33 (0.12)	—	3.9 (0.16)	—	4.34 (0.09)		
居心地悪い大切な居場所	<i>n</i>	3	—	15	6	4	1.996	<i>n. s.</i>
	M (SD)	3.5 (0.90)	—	3.18 (0.75)	2.54 (0.64)	3.62 (0.92)		

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

表6 各居場所におけるイメージ図選択群別のキャラの受け止め・行動の平均及び分散分析結果

		内側	外側分離	外側接触	完全包囲	重複	F値	多重比較
居心地良い居場所	キャラの積極的受容	3.2(0.71)	—	3.14(0.39)	—	3.14(1.12)	0.31	<i>n. s.</i>
	キャラの拒否	2.45(0.62)	—	2.84(0.68)	—	2.38(1.22)	1.05	
	キャラへの無関心	4.08(0.55)	—	3.59(1.04)	—	3.9(1.5)	0.89	
	キャラの消極的受容	3.58(0.58)	—	3.23(1.04)	—	3.45(1.5)	0.7	
	キャラ行動	2.72(1.06)	—	2.79(1.07)	—	2.5(1.41)	0.18	
居心地悪い大切な居場所	キャラの積極的受容	2.25(1.77)	—	3.22(0.94)	3.62(1.01)	3.17(0.52)	0.86	内側>外側接触 外側接触・完全包囲・重複>内側 重複>内側 <i>n. s.</i>
	キャラの拒否	4.12(1.24)	—	2.3(0.73)	2.31(1.11)	2.5(0.35)	2.56▲	
	キャラへの無関心	1.5(0.7)	—	3.63(0.35)	3.75(1.37)	4.33(0.94)	5.29*	
	キャラの消極的受容	2.25(1.77)	—	3.5(0.58)	3.34(0.25)	4.17(0.58)	2.98▲	
	キャラ行動	2.28(0.7)	—	2.74(1.24)	2.83(1.67)	2.66(0.67)	0.01	

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  ▲  $p < .1$  ( )内はSD

あったため、上記2. の回答頻度が比較的多く、各居場所において主要な位置関係を示すと考えられたイメージ図のみを扱った。そのため、「居心地良い居場所」においては、内側群、外側接触群、重複群の3群を独立変数とし、1要因3水準の分散分析を行った。「居心地悪い居場所」においては、内側群、外側接触群、完全包囲、重複群の4群を独立変数とし、1要因4水準の分散分析を行った。いずれも従属変数には、居場所感を用いた。平均および分散分析の結果を表5に示す。

その結果、「居心地良い居場所」において有意差がみられた( $F(3,60)=3.55, p<.05$ )。多重比較により、内側群と外側接触群、外側接触群と重複群のそれぞれの間に有意であった。これより、「居心地良い居場所」においては外側接触群が内側群や重複群よりも少ないといえる。「居心地悪い居場所」においては、関係位置イメージの持ち方によって居場所感に差はみられなかった。これより、「居心地悪い居場所」においては、関係位置イメージの持ち方によって居場所感に差がないといえる。

### 5. 居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係イメージ図別のキャラ受け止めの比較

「居心地良い居場所」と「居心地悪い大切な居場所」において「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係をどのように捉えているによって、キャラの受け止め・行動に差があるかを検討するために、居場所別に1要因の分散分析を行った。なお、独立変数については4. と同様に各居場所において主要な位置関係を示すと考えられたイメージ図のみを扱った。そのため「居心地良い居場所」は、内側群、外側接触群、重複群の3群を独立変数、「居心地悪い居場所」は、内側群、外側接触群、完全包囲、重複群の4群を独立変数とした。いずれも従属変数には、キャラの受け止め方・キャラ行動（キャラの積極的受容・キャラの拒否・キャラへの無関心・キャラの消極的受容・キャラ行動）を用いた。平均および分散分析の結果を表6に示す。

「居心地良い居場所」において「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係をどのように捉えているによって、キャラの積極的受容、キャラの拒否、キャラへの無関心、キャラの消極的受容、キャラ行動全てにおいて有意差が認められなかった。これより、「居心地良い居場所」において、「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係の捉え方に関わらず、キャラの受け止め・行動には差がないといえる。

「居心地悪いが大切な居場所」においては、キャラへの無関心に5%水準で有意差が認められ ( $F(3.13) = 5.29, p < .05$ )、キャラの拒否とキャラの消極的受容に有意傾向が認められた順に ( $F(3.13) = 2.56, p < .10$ ,  $F(3.12) = 2.98, p < .10$ )。キャラへの無関心の多重比較の結果、内側群が外側接触群・完全包囲群・重複群すべてに対して低いことが示された。キャラの拒否の多重比較の結果、内側群が外側接触群よりも得点が高いことが示された。キャラへの消極的受容の多重比較の結果、内側群と重複群の間に5%水準の有意差がみられ、内側群の得点が重複群よりも低いことが示された。これより、「居心地悪いが大切な居場所」において、「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係をどのように捉えているによって、キャラの受け止め・行動には一部差があるといえる。特に内側群と他の群に差がみられ、内側群はキャラの拒否得点が高く、消極的受容が低く、キャラに関して無関心ではないと言える。一方、キャラへの積極的受容とキャラ行動は有意ではなかった。

## 【考察】

### 1. 居場所の内容

「居心地良い居場所」では、家族、一人の時間、友人の順で回答が多く全体の75%を占めていた。回答がない項目は、専門の相談機関、SNSであった。「居心地悪い大切な居場所」では、家族、専門の相談機関、アルバイト、一人の時間の回答が多く70%以上を占めていた。回答がない項目は、ペットと過ごす時間、恋人であった。

家族は両方の居場所で最も多く回答されていることから、居心地が良くも悪くも大切な居場所として認知されているといえる。また、一人の時間も両方の居場所で回答が多い。現代の若者は、一人の時間が大切な居場所であり、一部の大学生には苦手だが息抜きや自分を振り返る大切な居場所として認知されていると考えられる。

各居場所に特徴的な点として、「居心地良い居場所」で友人と答えたものが多いこと、「居心地悪いが大切な居場所」で専門の相談機関、アルバイトが多いことがある。

友人は、青年期の大学生にとってやはり大事な存在

であることがわかる。専門の相談機関は、普段話せないような悩みを相談できる大切な居場所であるが、一方で話すことが辛い場合があることや援助要請自体の居心地の悪さ、相談行動を誰かに見られる不安などを伴う場所だと考えられる。そのため、「居心地悪いが大切な居場所」として選択されたと考えられる。アルバイトも大学生にとって大切な居場所として語られることが多いが、その理由には自分が役に立っている存在価値を語る者も少なくない。藤竹(2000)は「自分が他人によって必要とされ」、「自分の資質や能力を社会的に発揮することができ」、集団における「自分のポジションを明確」にできる「社会的居場所」を居場所の分類の一つに挙げている。アルバイトは、藤竹(2000)が述べる「社会的居場所」の意味も含まれていると考えられる。また、収入を得るための仕事場面でもあり、努力や多少無理して場に合わせることも求められる場所である。専門の相談機関やアルバイトに共通する点は、その場に参加するために多少の努力が求められるものの自分にとって必要な居場所であり、このような居場所も存在すると考えられる。

SNSも「居心地悪いが大切な居場所」として回答されていることから、居心地の悪さがありながらも大切な居場所だと認識している者がいることがわかる。

### 2. 各居場所における居場所感の比較

「居心地良い居場所」が「居心地悪い大切な居場所」より居場所感得点が高かった。「居心地悪い大切な居場所」は、先述した藤竹(2000)の「社会的居場所」のような誰かの役に立っている感覚や受け入れられている感覚をもてる居場所でもあると考えられる。一方、「最も快適で居心地が良い居場所」は藤竹(2000)が述べる「安らぎを覚えたり、ほっとすることができ」、「人間が自分自身であることを実感することができる」居場所である「人間的居場所」に近いと考えられる。このような居場所と比べると「居心地悪い大切な居場所」は、居心地の良さやありのままの自分を出せる感覚が低い居場所だと考えられる。

本研究では、居場所についてより理解を深めるため「居心地悪いが大切な居場所」を設定したが、この居場所を、則定(2008)の「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場

所」として扱うことの是非については、今後の検討課題である。

### 3. 居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係および居場所感の比較

「居心地良い居場所」において、「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係は内側、外側接触、重複が多く、外側分離、完全包囲を選択する人は少なかった。また、表5より重複群、内側群は、外側接触群に比べて居場所感得点が高い傾向にあった。

「居心地良い居場所」では、「仮面の自分」を「本当の自分」の内側に描くパターン（内側群）、「仮面の自分」と「本当の自分」が独立しており繋がりを持っているパターン（外側接触）、「仮面の自分」も「本当の自分」も変わらないパターン（重複）が多く、「本当の自分」と「仮面の自分」が何らかの繋がりをしているものが多く選ばれている。「最も快適で居心地が良い居場所」においては、「本当の自分」と「仮面の自分」が繋がりを持つ関係にあることが求められるのであろう。また、居場所感得点は、本当の自分を表に出している内側群と重複群が高いことから、「仮面の自分」を「本当の自分」に内在化させて、「本当の自分」で他者（場所）に対応していけることが必要だと考えられる。

高木（2002）は、「本当の自分」と「仮面の自分」の理想的な関係性イメージは、「仮面の自分」が「本当の自分」の内側に描かれる内側イメージであると指摘している。このことから、「仮面の自分」を「本当の自分」に内在化していることが「最も快適で居心地が良い居場所」の条件だと考えられる。外側接触群も「仮面の自分」を「本当の自分」の中に取り込むことができれば、居場所をさらに居心地の良い場所にできるであろう。居場所を作る側は、内側群が「本当の自分」の内側に秘めている「仮面の自分」の側面を何らかのかたちで受け入れることが重要になると考える。

一方、「居心地悪い大切な居場所」では、外側接触を選ぶ人が最も多く、外側分離を選ぶ人は少なかった。また、各群間で居場所得点に差がないことが示された。「本当の自分」と「仮面の自分」が独立しつつ繋がりがあある外側接触は、「本当の自分」と「仮面の自分」のどちらも必要と思っており、使い分けている可能性がある。居心地の悪さに対して「本当の自分」だけでなく

「仮面の自分」も表出していることが考えられる。すなわち、居場所に馴染むために、周りに合わせた言動や行動を行っていると考えられる。

なお、居場所感に差がなかったことから、「居心地悪い大切な居場所」は先述した通り、多少無理して場に合わせることも求められる居場所だと考えられ、位置関係イメージ図がどのタイプであろうと努力や工夫が求められ、居場所感に差がないと考えられる。

ところで、「居心地悪いが大切な居場所」においても「本当の自分」と「仮面の自分」が完全に離れている外側分離は選ばれなかった。これより、居心地が悪くとも大切な居場所では、「本当の自分」とかけ離れた「仮面の自分」を演じることは少ないといえる。また、これらの居場所でも何らかの形で「本当の自分」を表現できることが重要だと考えられる。

以上より、「居心地の良い居場所」を得るためには、「仮面の自分」と「本当の自分」が何らかの繋がりをしていることを表現できることが重要だといえる。

### 4. 居場所における「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係イメージ図別のキャラ受け止めの比較

「居心地良い居場所」の位置関係イメージ図とキャラの受け止め方・行動において有意差はみられなかった。「居心地良い居場所」は、則定（2008）の「心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場所」であり、キャラが付与されることが生じにくい場所であることが結果に関係していると考えられる。

一方、「居心地悪い大切な居場所」の位置関係イメージ図とキャラの拒否は有意傾向があり、内側群は外側接触群に比べてキャラの拒否得点が高かった。「本当の自分」の中に「仮面の自分」を描いている人は、付与されたキャラについて嫌だと感じていたり、そのキャラではないのと感じていたりするといえる。外側接触群は、「本当の自分」と「仮面の自分」が独立していることから、「居心地は悪いが大切な居場所」において普段からキャラを使い分けている可能性が示唆される。

キャラへの無関心では有意差があり、内側群は重複群・外側接触群・完全包囲群に比べてキャラへの無関心得点が低かった。重複群は、「本当の自分」も「仮

面の自分」も変わらない為、キャラを付与されたとしてもどうでもいいと捉えている可能性がある。外側接触群と完全包囲群は、「仮面の自分」を外に表現しているためキャラの付与に対しあまり関心が無いと考えられる。一方、内側群は自身に付与されたキャラを気にしているといえる。「本当の自分」を表現しているため、付与されたキャラと「本当の自分」にズレがある場合、キャラに合わせて「本当の自分」を歪めることは苦しいことだと考えられる。また、「仮面の自分」をできるだけ表に出したくない可能性もあり、キャラが付与されることに対して無関心であることは難しい可能性もある。

キャラの消極的受容は有意傾向であり、重複群は内側群に比べてキャラの消極的受容得点が高かった。「本当の自分」も「仮面の自分」も変わらない重複群は自分に合ったキャラを付与されている可能性があり、「〇〇キャラだと言われるのはしょうがないと思う」や「〇〇キャラとして扱われるのはやむを得ない」という消極的受容の得点が高くなったと考えられる。

### 【まとめと今後に向けて】

以上より、「居心地良い居場所」では内側群が最も居場所感を感じる適応的な群であり、「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係がどのようなものであろうとも付与されるキャラに対する意識に差がないことが示された。しかし、「居心地悪い大切な居場所」では、内側群は付与されたキャラを意識しやすく、否定的で受容することが難しいことが示唆された。

千島・村上(2016)は、大学生は「比較的キャラを持つものの割合が多く、キャラの受容や行動」が多いこと、「付与されたキャラを消極的にでも受け入れることで、居場所感」を得ることを示している。そして、「大学生はキャラを自分自身の一部として比較的受け入れており、心理的適応を保ちながら、キャラを介して友人と付き合い合っている」と述べている。しかし、居場所の種類により、また「本当の自分」と「仮面の自分」という自己の在り方により、キャラの受け止め方に違いあることが本研究から示された。現在の友人関係の中で多用されるキャラは、思春期・青年期の若者の適応に関連する要因だと考えられる。自己・居場所・キャラの受け止めの

関連は、これまであまり検討されていないため、今後さらなる検討が求められる。

また、「本当の自分」と「仮面の自分」の位置関係から、居心地がよく快適な居場所を作るには、「本当の自分」と「仮面の自分」に繋がりが求められることがわかった。青年期に「本当の自分」を表に出しやすい環境づくりと同時に、「仮面の自分」を受け入れてくれる環境や人がいることも必要だと考えられる。

さらに、中学生ではキャラの受け止めが異なることから(千島・村上、2016)、中学生を対象とした検討や青年期男性を対象とした検討も今後の課題である。

### 付記

- 1 本論文は、伊藤美希の卒業研究(2018年度)を加筆修正したものである。

### 引用文献

- 安斎智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達 96,33-37.  
 石本雄真 2008 居場所感に関連する大学生の生活の側面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2(1),1-6.  
 岩井律子 2014 大学キャンパスにおける大学生の主観的居場所体験と後期青年期人格発達の検討:物理的環境との関連から 国際基督教大学教育研究 56,89-99.  
 北山修 2003 自分の居場所—精神分析理論と臨床—住田正樹・南博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 21-37.  
 中藤信哉 2012 「居場所のなさ」についての研究 京都大学大学院教育学研究科紀要 58,209-220.  
 中藤信哉 2017 心理臨床と「居場所」創元社  
 西中華子・石本雄真 2017 児童期・青年期の居場所の分類とその機能の検討:居場所感の要素による居場所の分類 神戸大学発達・臨床心理学研究 16, 32-41.  
 則定百合子 2008 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究 41,64-72.  
 小川将司・佐々木淳 2018 大学生の"キャラ"と自己の在り方をめぐる葛藤過程 心理臨床学研究 35(6), 573-583.  
 千島雄太・村上達也 2016 友人関係における"キャラ"の受け止め方と心理的適応—中学生と大学生の比較—教育心理学研究 64(1), 1-12.  
 住田正樹 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文(編) 子どもたちの子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 3-17.  
 高木綾 2002 青年期における異なる自己像とその関係性イメージについて—いわゆる「本当の自分」と「借り物の自分」の観点から 心理臨床学研究 20(5),488-500.  
 土井隆義 2009 キャラ化する/される子どもたち・排除型社会における新たな人間像 岩波ブックレット  
 藤竹暁 2000 居場所を考える 藤竹暁(編) 現代人の居場所(現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ 3) 47-57 東京:至文堂



富永幹人・山田梨紗子 2016 自己像と居場所感に関する  
研究 —「本当の自分」と「仮面の自分」の観点から—  
福岡女学院大学紀要人間関係学部編 17,29-42.

